26P-pm226

日向薬（ひゅうがくすり）事始め（その 7）－延岡における医学所「明道館」の設立と藩士教育

◯山本　郁男[1,2], 井本　真澄[1,2], 宇佐見　則行[1,2], 岸　信行[2,3]（[1]九州保福大薬, [2]九州保福大QOL研究機構, [3]延岡北小路調剤薬局）

【目的】江戸時代以降の日向（宮崎と一部鹿児島県）における医薬に関しての系統的な歴史的研究は少ない。この因は非常に資料が少ないことにある。演者らはこれまで日向の各藩政下、特に延岡における医師を中心にその足跡を業績と共に報告してきた[1)]。本報では、延岡藩における医薬教育の場として開設された医学所「明道館」をとりあげる。【内容】16 世紀後半より高橋、有馬、三浦、牧野と次々と藩主の交代をみた延岡も譜代大名、内藤政樹（まさき）（1747）を得て、以後 8 代政挙（まさたか）（1871）まで続く。特に各内藤藩主は教育には極めて積極的で、かつ各所にあった天領には知的水準の高い代官が配属されていたため、江戸や京都に遠い位置にあるにも拘わらず、江戸と変わらぬ位の高い教育がなされていた。延岡藩では、藩校として嘉永 3（1850）年、それまでの学問所と武芸所を新たに「広業館」と改名し、一層の藩士教育の充実を計っている。これらの延長として安政 4（1857）年、新妻金夫と早川図書の二人は医師育成の場として「明道館」を設立した。この間の経緯を述べると共に新妻と早川の二人の経歴をできる限り調査した。この明道館は、当時、九州における医育機関は長崎、熊本、鹿児島にあったのみであり、またこの年に奇しくも江戸に「種痘所」が設けられていることから特筆に値する。この頃より、延岡の他、日向各地には多くの私塾が開設され、藩士教育がなされた。後にこれら私塾の多くは単に藩士のみではなく、庶民の教育も行い、日向国の文化向上に大きな役割を果たしたといえる。さらに、この時代の日向における学問体系についても附言する。【文献】1）山本、井本、宇佐見、岸、日向薬事始め（その 6）、日本薬史学会 2008 年会、要旨集 p.17（2008）